北陸学院スタンダードによる聖書・キリスト教教育の実践と課題

The Practice and the Task of biblical Christian Education based on the Hokurikugakuin Standard

楠　本　史　郎*

Abstract

The core of the Hokurikugakuin standard is the biblical Christian education. In this thesis I consider the practice of that in Hokurikugakuin kindergartens, elementary school, junior high school, senior high school, junior college and university, and point out the task that we should take.

キーワード：「北陸学院スタンダード」／「聖書キリスト教教育」／「関係性」

はじめに

2008年4月に北陸学院大学が開学した[1)]。これにより、北陸学院は幼稚園から小学校、中学校、高等学校、大学および短期大学部を持つ私学総合学園となった。3歳から22歳までの一貫教育が可能となった。2007年9月、学院長のもとに北陸学院スタンダード作成委員会を設け、各教育分野の代表者が委員となった。以来、大学開学後の学院全体の教育内容を検討し、教育分野ごとのスタンダード作成に取り組んできた。

以下に、北陸学院スタンダードの理念と内容、そのなかの聖書・キリスト教教育について述べ、その現状と課題を指摘する。

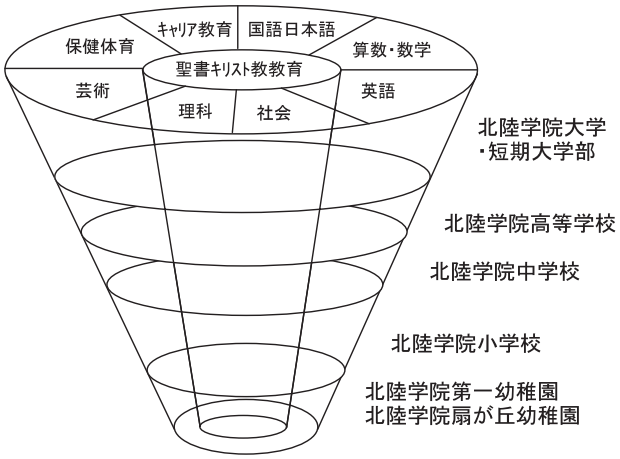

図1　聖書・キリスト教教育概念図

1. 北陸学院スタンダード　《図1参照》

このスタンダードの内容は以下の3点である。

1）一貫教育

北陸学院は幼稚園から小学校、中学校、高等学校、大学･短期大学へと至る一貫教育をおこなう。これは、いわゆる入学試験の受験準備を目的とした一貫教育ではない。むしろ受験に精力を割かれることなく、キリスト教による人格形成に時間と力を集中する。一人ひとりの成長に合わせて各教科の学習内容を確実に学び取り、大きく発展させることを目指す。その見取り図が北陸学院スタンダードである。

2）キリスト教教育

スタンダード全体の土台は聖書・キリスト教教育である。神を知ることで、自分が神に愛され、かけがえのない存在とされていることを知る。そのうえで、人と自然、世界を知り、愛する。神と自己との関係を認識することにより、同じ神に愛される他者との関係へと入れられ、また神が造り、保たれる自然・世界に関心を広げていく。

3）各教科スタンダード

北陸学院スタンダードは当面、5教育分野において作成されている。順次、全教育分野に及ぶこ

＊ Shiro KUSUMOTO
北陸学院大学　人間総合学部　社会福祉学科
キリスト教入門

とが課題である。

(1) 幼稚園から短期大学・大学までの各学校での教育目標と方法などを、キリスト教教育、英語教育、国語・日本語教育、算数・数学教育、キャリア教育の教科ごとに一貫して示している。この線に沿い、各学校は、前段階の学校の教育内容をふまえたうえで、教育プログラムを立て、実施する。そのため､無理なく力を伸ばすことができる。

(2) 一貫し、連続したスタンダードを確立することで、幼稚園から小学校へ、小学校から中学校、高等学校、短期大学および大学へという学校相互の連携を密にする。これにより、円滑に、効率よく学びを進めることができる。

(3) それぞれの教育分野で、学年に応じた目標を設定している。この目標は北陸学院の中だけではなく、客観的な基準に対応している。国内・国際的な評価基準や各種検定に照らして理解度を検証しつつ教育を進める。これにより、どこでも通用する力を養う。

(4) 一方、スタンダードは標準であって、すべての園児・児童・生徒・学生が到達すべき絶対的基準ではない。この標準を目指しつつ、各自の資質と力に応じたもっとも良い指導を、柔軟におこなう。さまざまな個性、人格を広く受け入れる。

(5)北陸学院の教育内容を明らかにすることで、家庭・保護者の理解と協力が得られるよう努力する。家庭と学校が一つとなって若い魂を育み、ともに成長することを願っている。

(6) 各学年に応じた標準を設定することで、教師もまた、教育力の向上を目指して各種の検定試験を受験し、あるいは研修会に参加するなど、自己研鑽に励む。

(7) 毎年度、到達度を確かめ、実際に即してスタンダードを改訂していく。

2. 聖書・キリスト教教育　《表１参照》

北陸学院は、キリスト教を基盤として建てられた。123 年前の 1885（明治 18）年に、米国長老教会より送られたメリー・ヘッセル宣教師が金沢女学校を設立して始まった。以後、キリスト教の影

表１　北陸学院スタンダード　聖書・キリスト教教育

〈全体目標〉 神・人・自然・社会・歴史と自分との関係性を発見し、その中に生き、それを深め、広げる
〈方法〉 幼稚園では礼拝と諸行事、小学校以降では礼拝、授業、諸行事
北陸学院第一幼稚園・北陸学院扇が丘幼稚園　　出会い
イエスさまをとおして、神さまを身近に感じる 神、人、自然、世界と出会う
北陸学院小学校　　関係性の基礎づくり
聖書を知り、言葉を聞き、賛美し、祈る。 人、世界との関わりを知り、求める 神の造られた自然に親しむ
北陸学院中学校　　関係性を広げる
聖書を通して自分を見つめ、生きる上で大切なことは何か考える 新約のイエスの生涯を学び、人、自然、世界との関わりに目を向ける
北陸学院高等学校　　関係性を深める
聖書をとおして神、人、自然、世界との関わりを考え、深める 旧約をとおして歴史の意味を考える 自分に与えられた使命について考える。
北陸学院大学・短期大学部　　関係性を理解し、作り出す
聖書の内容を学び、神、人、自然、世界、歴史との関わりのなかにある自分を探求する 自分に与えられた使命について考え、それを実現ための力を養う

響を排除した国家主義に傾きがちな日本の教育政策のなかで、聖書に立つ教育を守り続けてきた[2)]。

今日でも、北陸学院の教育の土台は、詩編111編10節に示された「主を畏れることは知恵の初め」という精神である。これに基づき、以下を聖書・キリスト教教育の基本とする。

(1) 自分が神に造られ、愛されているかけがえのない存在であることを知り、与えられた力を伸ばし磨いて自分の使命Missionを発見し、その実現に努める。

(2) 自然と世界が神に造られたすばらしいものであることを知って積極的に触れ、これを学び、深く探求する。

(3) 友だちや先生、世界の人々もまた神に造られ、愛される尊い存在であることを知り、互いに信頼し、協力し合って、新しい関係を結ぶよう求める。

この場合、園児・児童・生徒・学生本人また家庭の宗教的立場は問わない。聖書・キリスト教教育によって信仰を強制することはない。むしろ聖書の精神に触れることで、生きること、学ぶこと、仕えることなど、人生の大切な課題に向き合い、それと取り組みながら学ぶことを目指す。

聖書・キリスト教教育の目標は、自分と神・人・自然・社会・歴史との関係性を発見し、そのなかに生き、それを深め、広げることにある。したがって、ここでの鍵語は「関係性」である。

3. 北陸学院第一幼稚園・北陸学院扇が丘幼稚園における聖書・キリスト教教育　出会い《表2参照》

北陸学院幼稚園では、まず幼児が、神がいつも共におられ、自分を守ってくださることを知り、経験することを重んじる。そこから、生きる自信と人への信頼、友だちとのかかわり、そして自然や世界への関心が大きく広がっていく。

3. 1）教育目標・方針

詩編111：10の学院標語のもと、「一人ひとりが輝き、ともに響きあう心を育む」を目標に、次の方針を掲げる。

(1) 子どもが、自分自身を大切な存在として受け入れられていることを感じるとともに、自分と他との違いを認め、他を受け入れることや思いやりの心をもつことなど、人間関係の原点を学ぶ。

(2)遊びを中心とするさまざまな経験のなかで、創造性を培い、一人ひとりが輝き、ともに響き合う心を育む。

(3) 子どもが、自分たちの生きる世界や自然を神の恵みとして受けとめ、感謝の気持ちを豊かに表現する。

以上の前提にキリスト教教育がある。主イエスを通して神の存在を身近に感じ取り、自分が神に愛され、守られていることを知る。礼拝によって神との関係の中に入れられ、神を賛美し、感謝する。この神との関係にもとづき、他者と関わる意志が芽生える。友だちとの交流が育つ。さらに、同じ神によって造られた世界や自然に親しみ、関わる。こうして自分の個性が豊かになり、また他者とともに遊びを作りあげる力が生まれていく。

3. 2）内容

年間主題と毎月の主題、聖句が定められる。幼稚園教育の全体が聖書・キリスト教に基づき、関

表2　北陸学院第一幼稚園・北陸学院扇が丘幼稚園　　出会い

目　標	学　年　目　標		時　間
1) 神さまの存在を知り、感謝の気持ちを持つ 2) 人間関係の原点を学ぶ 3) 自然と世界に親しみ、創造性を培う 4) 一人ひとりが輝き、ともに響きあう心を育む	3歳	・イエスさまをとおして神さまを身近に感じる	1) 毎日のクラス礼拝 2) 毎週1日の合同礼拝 3) 行事 花の日、収穫感謝、クリスマスなど
	4歳	・神さまが下さった恵みに目を向け、感謝する気持ちを持つ	
	5歳	・神さまの恵みに感謝し、神さまに喜ばれる子どもとして、考え、行動する ・自然や世界の事柄に関心を持ち、自分たちのできることを考え行う ・毎日の礼拝で神さまの前に心を静める	

連づけられている。その中でもとくにキリスト教教育にとって重要なのは以下の事項である。

(1) 礼拝

毎日、礼拝がおこなわれ、全園児が加わる。学年ごと、学級ごとに副園長・担任の教諭が礼拝をおこなう。週１回、全員が参加する園全体の礼拝がおこなわれ、園長が奨励する。どの礼拝でも、その月の聖句を暗誦し、賛美歌を歌い、祈って聖書の話を聞く。言葉に触れる重要な機会でもある。とくに幼児の場合、聖句や賛美歌は、聖書を読み、賛美歌集を見て歌うわけではない。すべて言葉と音を聞き取り、覚えておこなう。キリスト教教育は、言葉を聞くことから始まる[3]。

自由な遊びを中心とする保育を行っている。その中心が礼拝である。園児が幼稚園に登園し、まず心と体を開放して遊び込む。その後、神の前に静まり、心を合わせて礼拝に集中する。そこからまた、遊びに集中していく。幼稚園の一日の生活が礼拝を中心とし、リズムをもって流れていく。

(2) 行事

入園式や母の日、花の日、プレイデー、収穫感謝、クリスマス、保育修了証書授与式等の式や行事は、すべて礼拝の形で行われ、あるいは礼拝から始まる。また毎月の誕生会には誕生児の保護者を招き、昼食を共にして祝うとともに、命を与え、成長させてくださった神に感謝する。すべて幼稚園生活の節目ごとに、神の恵みを感じ取る。

とくにクリスマスには、園児たちが主イエスの降誕劇を演じることにより、聖書の物語を体験し、理解する。クリスマスのメッセージを、集まった保護者たちに伝えていく。

毎日、昼食前には、ともに祈り、食べ物をくださる恵みの神に感謝をささげる。

(3) 保護者に地域教会の教会学校[4]案内をおこない、園児が教会学校に出席することを勧めている。

(4) 教職員の礼拝と聖書研究

毎朝、始業前に教職員の礼拝を行っている。賛美歌を歌い、聖書を読み、テキストによる奨励を読み、祈る。週に１回は園長が奨励をおこなう。その後、一日の打ち合わせをおこなう。

毎月の教師会では、園長が聖書研究をおこない、聖書の言葉に一同が聞いている。

教職員がそれぞれ、主日礼拝に出席する教会を定め、なるべく礼拝生活を守るよう指導する。

(5) 保護者に対するキリスト教教育

幼稚園行事に保護者が参加する場合、園児とともに礼拝に加わる。幼稚園で知った食前の祈りを、家庭でおこなっている場合も見られる。

毎学期、園長・副園長と保護者が話し合う会をもつ。ともに礼拝をささげる。賛美歌を歌い、祈り、園長が聖書研究をおこなう。幼稚園教育について、園児の様子、クラスの現状、家庭での幼児教育などについて話し合うほか、聖書や教会、キリスト教についても話し合う。

保護者会（第一幼稚園は「カナの会」、扇が丘幼稚園は「ぶどうの会」と称する）の主催する歓迎会やクリスマス、送別会は礼拝によって始まる。賛美歌を歌い、祈り、園長が奨励を行う。

降誕日や復活日、母の日、花の日、また特別伝道礼拝など、教会でおこなわれる礼拝に家族で参加するよう勧めている。

3. 3）課題

(1) 礼拝の場所と奨励者

北陸学院幼稚園は特定の関係教会を持たない。したがって礼拝は教会堂ではなく、保育室やホールでおこなわれる。大学礼拝堂における礼拝形式の保育修了証書授与式などにしても、礼拝共同体である教会の場で行われるのではない。あくまでも学校礼拝の一形態である。奨励者もまた、必ずしもキリスト者であるとは限らない。教諭の半数は非キリスト者である。

園児には、地域教会の教会学校を紹介し、主日の礼拝生活を勧めている。幼児が礼拝で聖書の言葉を集中して聞くことは、宗教的情操を養うだけではなく、言葉の発達、人間関係の形成、より広い世界への関心を促す点でも重要である。

保護者の場合も同様である。そのために北陸学院幼稚園が責任をもって出席を勧められる地域諸教会との関係を重んじ、維持する。

教諭に対して、教会の礼拝に出席するよう勧める。これは義務や業務ではなく、キリスト教保育に携わることの意味を理解するためである。

(2) キリスト教教育指導者

北陸学院幼稚園にはキリスト教教育専任の教務教師[5]がいない。2008年度現在、日本基督教団

教務教師が園長を務め、幼稚園におけるキリスト教教育の責任を負っている。園長とは別に専任の教務教師を招聘することは困難であり、また北陸学院全体のキリスト教教育を担う機関もないのが現状である。

(3) キリスト者である教諭の確保

幼稚園におけるキリスト教教育を充実するためには、半数以上のキリスト者教諭を確保することが望ましい。少なくとも非キリスト者に対しては、採用時、また採用後にも、教会での礼拝生活を勧め、指導することが重要である。この意味でも、石川県キリスト教幼稚園連合会やキリスト教保育連盟北陸部会などの研修会において、信仰への招きが継続されることが望ましい。

(4) 教職員礼拝の確保と教師会聖書研究の充実

現状では通園バス運行に教職員の手が割かれ、毎朝、全員が参加して礼拝を行うことができない。これに代わり、園児の降園後、全員が揃ってから祈るなど、方法を模索する必要がある。また教師会における聖書研究を充実することも課題である。

4. 北陸学院小学校における聖書・キリスト教教育　関係性の基礎づくり《表３参照》

4. 1）教育目標・方針

詩編 111:10 の学院標語のもと、教育目標を「教育基本法及び学校教育基本法に従い、児童の心身の発達に応じて初等普通教育を施すことを目的とし、キリスト教の精神による人格教育を目指す」とし、以下の教育方針を掲げる。

(1) キリスト教による心の教育

毎日の礼拝を重んじ、聖書の学習・宗教行事・日常生活の指導を通してキリスト教教育の浸透を図る。また、日曜日の教会学校への出席を奨励す

表３　北陸学院小学校　関係性の基礎づくり

目　標	学　年	学　年　目　標	教材・時間
1）聖書に触れ、神が共におられることを知る 2）毎朝、学校礼拝をまもり、神の恵みを知る 3）行事において、この学校が神の恵みによって建てられ、守られていることを知る 4）友だちもまた神に造られ、愛されているかけがえのない存在であることを知り、関わりを深める 5）神に愛される世界、国、自然に関心を持ち、それに関わり、愛することを学ぶ 6）日曜日ごと、地域諸教会の教会学校に出席し、聖書をより深く学ぶことを勧める 7）花の日などに保護者を招き、ともに礼拝することで、聖書の真実を広く伝える	1年	・主イエスを知り、出会う ・聖書と讃美歌の使い方を知り、礼拝に参加する ・毎日の礼拝で神さまの前に心を静める	1）教材：新共同訳『新約聖書』、『改訂版こどもさんびか』(日本基督教団出版局) 2）時間： ①毎週４日の合同礼拝 ②毎週２日の学級礼拝 ③行事 花の日・収穫感謝・クリスマス等
	2年	・聖書の物語を生き生きと心に受け入れる ・礼拝の大切さを知り、集中できるようにする ・祈ることができるようになる	
	3年	・礼拝で語られる事柄を理解する ・自分で聖書を読み、疑問を調べる	
	4年	・旧約聖書に触れ、その物語に親しむ ・宗教委員会に参加し、礼拝の司会や献金の祈りを担当する	
	5年	・父、子、聖霊の三位一体の神を知る ・礼拝の司会、献金の祈りなどを担当し、礼拝を支える ・北陸学院の歴史を知る	
	6年	・主イエスの地上の生涯を学び、図や表にあらわして理解する ・聖書、教会、礼拝等について疑問を表現し、話し合い、互いの意見を理解しあう ・修養会で中学校進学の基礎を作り、キリスト教について理解を深める	

る。さらに、家庭の理解をはかるために宗教行事への父母の参加を求める。育友会に宗教委員会を置き、定期的に聖書を学ぶ集いを持っている。

(2) 豊かな人間性の育成

一人一人の個性を大切にし、豊かな人間性を培い、目標に向かってやりぬく子どもを育てる。

(3) 基礎学力の充実

児童一人ひとりの理解に努め、児童の個性に応じたきめ細かな指導を行う。

ここで、小学校教育全体の中心が聖書教育にあることが示されている。実際、毎日の礼拝を中心として聖書に触れている。そこから、恵みの神を知り、生きる力を養う。また友だちや先生との信頼の絆を深め、自然、世界、社会に興味を広げることを目指す。

4. 2）内容

(1) 礼拝

毎日、朝、授業開始前の８：45～9：00の15分間、礼拝を行う。この礼拝が、本校キリスト教教育の柱である。火曜日から木曜日までの３日は全校生徒が集まり全体で行う。奨励者は校長･教諭、学院長や地域教会牧師である。残り２日は学級礼拝であり、月曜日は交換礼拝として他学級の担任教諭が、金曜日は担任教諭が奨励を行う。この礼拝奨励者は、キリスト者である教諭である。毎週水曜日には献金があり、児童による宗教委員会が決めた団体・地域に捧げられる。

礼拝は前期、後期によって主題が定められ、それに従い行われる。教会暦による復活日、聖霊降臨日、花の日、収穫感謝、降誕日の礼拝を地域教会牧師が奨励を担当する。また待降節や四旬節には、聖書箇所を予め定めている。ロバートソン基金から児童に贈られた『新約聖書』（新共同訳）と『改訂版こどもさんびか』を用いる。

とくに聖書科の授業時間は設けていない。礼拝および他教科の授業、行事等のなかで聖書知識、キリスト教の考え方を学ぶ。

(2) 行事

すべての学校行事、また学校生活はキリスト教にもとづいて行われる。入学式や卒業証書授与式、運動会、夏期学校、学習発表会、スキー合宿なども、礼拝形式で、あるいは礼拝をもって始める。

夏期学校は主題を定め、それに基づいて開会礼拝の奨励がおこなわれる。朝礼拝でも聖書の言葉が語られる。

秋の学習発表会では、毎年３年生が聖書劇を創作し、演じる。とくに降誕日礼拝において、主イエスの降誕劇をすべての児童が演ずる。これらにより児童の聖書理解を深め、また出席した保護者にキリスト教を伝える役割を果たしている。

卒業を前にした６年生の一泊修養会をおこない、地域牧師の奨励を受ける。中学校入学の準備として、本校の土台にあるキリスト教の精神を知る。とくに公立中学校に進む児童には、北陸学院で学んだことの意味を確認する機会となっている。

(3) 児童による宗教委員会活動

４年生以上の児童が各学年から選ばれ、宗教委員会を構成する。宗教委員が全校礼拝の司会や献金を担当する。お弁当や給食の前に、感謝の祈りをささげる。花の日には、児童が持ってきた花を病院等に届ける。また聖書物語に基づき紙芝居やペープサートを作成し、学校で発表する。

毎週ささげられる献金の送り先を決定する。予めその団体について、活動内容などを調べ、壁新聞で発表する。献金後、寄せられる感謝の手紙を紹介し、さらに新しい活動があれば、それを全校児童に伝える。能登半島沖地震や中国・四川省地震などに対して捧げられた。

(4) その他のキリスト教活動

図書の充実を図っている。とくにキリスト教関係図書を第１分類とし、児童にふさわしい図書を揃えている。授業でも図書を紹介し、読書の環境を整える。保護者も小学校図書室を、さらに大学図書館を利用することができる。

ハンドベルクラブ活動が盛んであり、とくにクリスマスには、一般市民向けだけでなく、教会やキリスト教幼稚園、養護老人ホーム、県立総合養護学校、さらに金沢刑務所で賛美歌等を演奏する。演奏会の合間に、ハンドベルの説明とともにクリスマスの意味を伝える。

キリスト教学校である近江兄弟社小学校や青山学院初等部、さらにオーストラリアのジブゲイト校と姉妹校提携している。相互に訪問しあい、ホームステイを行う。広く信仰に触れ、児童のキリスト教理解を深める機会ともなっている。

キリスト教幼稚園以外の幼稚園・保育園出身の児童も入学しているが、全員に地域諸教会の教会学校に出席することを勧めている。児童ノートに教会学校案内を載せ、家庭の近くの教会を紹介する。多くの児童が、日曜日の教会に出席している。

(5) 教職員のキリスト教活動

毎朝、始業前に職員礼拝を持つ。賛美歌を歌い、聖書を読み、祈ってから一日の打ち合わせを行う。教職員が日曜日の教会の礼拝に出席することを勧める。全教員が、出席教会を決めて、主日礼拝への参加を心がけている。

またキリスト教学校教育同盟関西部会・小学校部会研修会に参加し、小学校教育の学びとともにキリスト教理解を深めている。

(6) 育友会のキリスト教活動

保護者の集いである育友会には、校育開発委員会、事業運営委員会、広報委員会とともに宗教委員会が設けられ、保護者によるキリスト教活動が行われている。学院内キリスト者教員や地域教会牧師を招いて講演会を開催し、また「木いちごの会」を行い、聖書研究会やチャペル・コンサートなどを年に数回実施している。クリスマスの礼拝と祝会を催し、また「一粒の麦」という通信を発行してキリスト教活動の報告と呼びかけを行っている。保護者がキリスト教に触れ、家庭や子育てについて考える機会となっている。

4. 3) 課題

(1) キリスト者教諭の確保と育成

現在、キリスト者である教諭は半数を占めているが、若い教諭には少ない。このことは、本校のキリスト教教育にとって大きな課題である。キリスト者である教諭を採用する、それができない場合は、未受洗者である教諭が地域教会の礼拝に出席し、信仰へと導かれるよう願う。そのためにも、本校のキリスト教教育が、さらに豊かで魅力ある内容となるよう努力することが欠かせない。

(2) キリスト教教育指導者

本校にはキリスト教教育専任の教務教師がいない。学校規模から、招聘は困難である。校長および宗教科担当教諭が全体の責任を負い、学院長および地域教会牧師方の協力を得て、礼拝や行事が行われる。北陸学院全体のキリスト教教育を担う機関の設置が課題である。現在は、各校のキリスト教教育担当者が集まり、北陸学院スタンダード・キリスト教部会を構成している。ここで学院全体のキリスト教教育の現状と課題を話し合い、問題意識を共有する。部会組織の明確化と定期開催、人事を含む課題解決能力が求められる。

(3) 礼拝の充実

現在、聖書・キリスト教科の授業時間を設けていない。それだけに学校礼拝の内容が問われる。従来の形を踏襲するだけではなく、全校で礼拝とは何かを問い続ける必要がある。聖書の言葉を聞く姿勢、賛美と祈りの意味、奨励の内容、感謝の応答、一つひとつが吟味され、全児童が心を集中して守る礼拝を確立していくことが課題である。

(4) 児童および保護者への働きかけ

現在、児童ノートに地域諸教会案内を掲載し、教会および教会学校への出席を勧めている。本校の教育におけるキリスト教教育の位置を確認し、児童と保護者に伝えることが求められる。また地域諸教会との連携を強めていく必要がある。

5. 北陸学院中学校における聖書・キリスト教教育　関係性を広げる《表4参照》

5. 1) 教育目標・方針

北陸学院中学校は、建学の精神（詩編111：10）に立脚し、神を畏れる心を育て、真の知恵を身に付けられるよう生徒たちを導く。他者との関係を大切にし、社会や世界をも築きあげていける、真の”WISDOM”を持つ人へと成長することを目指す。そのために以下の教育方針を持つ。

(1) 宗教教育　聖書の教えに基づき、関係を造り上げていける人を育てます。自分との関係、他者との関係、社会や世界との関係、神との関係を学びます。

(2) 人格教育　自分と他者を尊重できる人を育てます。一人ひとりの人格は神に創られたかけがえのない人格であることを学びます。

(3) 知育体育　確かな基礎学力を身につけるとともに、心身を養い鍛えます。

(4) 国際教育　自らを知り、自らが属する文化を学ぶとともに、世界に開かれた精神と能力の持ち主を育てます。

宗教教育が第一に挙げられ、聖書・キリスト教教育が学校の柱であることが明示されている。

表４　北陸学院中学校　関係性を広げる

目　標	学　年	学　年　目　標	時　間
1）聖書に触れ、神がともにおられることを知る 2）毎朝、学校礼拝をまもり、神の恵みを知って一日の学校生活を始める 3）毎週１時間の授業をとおして、聖書をより深く学ぶ 4）この学校が神の恵みによって建てられ、守られていることを知る 5）友だちもまた神に造られ、愛されているかけがえのない存在であることを知り、尊重し、関わりを深める 6）神に愛され造られた世界、国、自然に関心を持ち、学びつつ、それと関わり、愛することを学ぶ 7）日曜日、地域諸教会の礼拝・中学科に出席し、聖書をより深く学ぶことを勧める	１年	・聖書と讃美歌の使い方を知り、礼拝に参加し、神の前に心を静める ・聖書物語をとおして、そこに語られていることが、自分が生きるうえで大切なことであると知る ・北陸学院の歴史を知り、自分自身のMissionを考える力を身に付ける ・教材　新共同訳『聖書』、米国長老教会『初めてのカテキズム』	1）週４日の合同礼拝 2）週２日のクラス礼拝 3）毎週１時間の授業 4）学年別修養会 5）行事 花の日・収穫感謝・クリスマス等
	２年	・福音書によってイエスの生涯を学ぶ ・イエスとは誰か、その言葉と行動をとおして学ぶ ・イエスをとおして、人生について、命、光、真理、愛について学び、自分がどう生きるかを考える ・教材　新共同訳『聖書』、『神の揺さぶり』	
	３年	・聖書を読み、御言葉に心を開いて耳を傾け、礼拝生活を大切にする ・新約聖書を学び、救い主イエス・キリストと出会い、共に祈る ・イエス・キリストの十字架と復活・福音書の御言葉を通して、「信仰とは何か」を共に考える ・学院の歴史を知り、北陸のキリスト教の歴史と学院、神を愛する心を育てる ・教材　新共訳『聖書』、『わたしたちは神さまのもの』、『新約聖書とは何か』	

5. 2）内容

（1）礼拝

毎朝8:40～9:00の20分間、持っている。月、水、金曜日は全校生徒が集まる「栄光館礼拝」、火曜日は中高合同礼拝を礼拝堂（栄光館）で行う。木曜日は宗教課から出される「クラス礼拝メッセージ」に基づき担任教諭が奨励をする「クラス献金礼拝」で、献金が捧げられる。土曜日はクラスで、奨励のない賛美礼拝をまもる。

『旧新約聖書』（新共同訳）および『讃美歌』1954年版と『讃美歌第２編』、『ともに歌おう』を使用している。

礼拝は宗教委員および会員の生徒が準備、司会、奏楽、献金、片付けを行う。栄光館での礼拝は、キリスト者の教職員や教会牧師が奨励を担当する。礼拝では全員で、毎月定められた聖句を暗誦する。

（2）聖書授業

毎週１時間、聖書の授業が行われる。本学院小学校からの入学者のほか、初めてキリスト教に触れる新入生のために、聖書と賛美歌の使い方、礼拝の心得に始まり、聖書物語、北陸学院の歴史、主イエスの生涯、新約聖書などを学ぶ。

（3）行事

４月に１年生修養会を１泊２日でおこなう。開会、閉会礼拝、朝礼拝を軸として、教科、学校生活などのほか、建学の精神、聖書とキリスト教についてなど、オリエンテーションを含め、親睦も兼ね

ている。2・3年生の修養会は行っていない。

6月に花の日礼拝があり、その後、ボランティア活動として生徒が特別養護老人施設を訪問する。箏曲、ハンドベルを演奏した後、花束を手渡す。

11月の収穫感謝礼拝の後、乳児院に果物を届ける。劇を創作し、乳幼児に披露する。

クリスマスには、小学生とその保護者を招き、キャンドルサービスの形で礼拝をまもる。そのなかで降誕劇を演じる。祝会で小学生を対象に、生徒が考えたゲームなどを行う。

(4) 生徒によるキリスト教活動

各クラスから選ばれた数人の宗教委員、また会員が宗教委員会を構成している。

春休みに卵を使った菓子を作り、卵の殻でイースターエッグの雛を制作し、入学式後の歓迎会で新入生に贈る。1年生の教室や用具の準備、整理などを行い、新入生が中学校生活に順応できるよう配慮する。

宗教委員と会員が学校礼拝を担当する。また9月の文化祭に、社会的問題などを取り上げて調査し、展示を行う。

宗教委員とその会員が北陸学院中学校YWCAを構成しており、全国集会や活動に参加する。

(5) その他のキリスト教活動

毎週金曜日8：00から早天祈祷会を行う。有志の生徒と宗教科を中心とする教諭のほか、高等学校生徒と教諭も参加する。

学年の初めに教会案内を配り、地域教会の教会学校への出席を勧める。早天祈祷会でも教会出席を勧める。毎月、1～2回の日曜日を「総員礼拝」とし、生徒、教職員に教会出席を呼びかける。宗教科から”Grace”という通信を毎月発行し、キリスト教と教会の案内を行う。

生徒は教会に出席すると「教会出席カード」に教会のサインを受け、「総合学習ノート」に貼付して提出する。それに基づき、必要に応じて宗教科教諭が助言する。

(6) 育友会のキリスト教活動

とくに聖書研究や講演会などの形では行われていない。しかし会合は礼拝をもって始められる。

5. 3) 課題

(1) 地域教会との連携

生徒には教会への出席を勧めている。しかし広範囲から生徒が通学してきているのが現状である。とくに年度の初めは月曜日から土曜日まで、授業や行事が多くある。そのため、家庭の近くに教会がない場合、教会出席のために日曜日の朝早く家を出ることが困難な生徒も多い。また教会によっては教会学校に中学科を設けていないところもある。そのため、日曜日に教会へ行く生活を定着させることは簡単ではない。早天祈祷会や通信などで粘り強く働きかけを続けていく必要がある。

(2) 生徒の意識

男子生徒が入学するようになり、聖書やキリスト教に対する意識を深めることが、かつての方法だけでは通用しにくい場合がある。

聖書の使信を内面的に深く受け取ることができるよう、礼拝や授業、行事のあり方が問われている。内容を充実し、生徒が聖書の言葉を深く聞き取り、求道する思いを持つように、さらには受洗にまでいたるように、願っている。

(3) キリスト者教諭の確保

聖書･キリスト教教育を柱とする本校にとって、キリスト者である教諭の確保はきわめて重要な課題である。若い魂に、教科とともに聖書の真理を伝えることを、神から与えられた使命と信じ、励む教諭が多く与えられるよう求める。また、非キリスト者である教諭が、本校での経験から、教会で求道し、洗礼を受けるにいたるよう願う。

(4) キリスト教教育指導者

本校には聖書・キリスト教教育の責任を担う専任教諭がいない。他教科教諭が宗教科を兼任し、また現在、校長が教務教師であるにとどまる。聖書・キリスト教教育のために、専任教諭が宗教主事として本校すべてのキリスト教活動を管轄することが望ましい。今後の重要な課題である。

6. 北陸学院高等学校における聖書・キリスト教教育　関係性を深める《表5参照》

6. 1) 教育目標・方針

北陸学院高等学校は、建学の精神（詩編111：10）に立脚し、生徒一人ひとりが自分のMission＝使命を発見し、それを実現するために全力を尽くすことを宣言している。そのために、キリスト教信仰に基づいた教育、すなわち生徒一人ひとり

表５　北陸学院高等学校　関係性を深める

目　標	学　年　目　標		時　間
1）聖書に触れ、神がともにおられることを知る 2）毎朝、学校礼拝をまもり、神の恵みを知って一日の学校生活を始める 3）毎週１時間の授業をとおして、聖書をより深く学ぶ 4）この学校が神の恵みによって建てられ、守られていることを知る 5）友だちもまた神に造られ、愛されているかけがえのない存在であることを知り、尊重し、関わりを深める 6）神に愛され造られた世界、国、自然に関心を持ち、学びつつ、それと関わり、愛することを学ぶ 7）神に愛され造られた世界、国、自然に関心を持ち、学びつつ、それと関わり、愛することを学ぶ 8）日曜日、地域諸教会の礼拝・高等科に出席し、聖書をより深く学ぶことを勧める	１年	・聖書と讃美歌の使い方を知り、礼拝に参加し、神の前に心を静める ・「神とは誰か」を問い、聖書とプリントにより、神のご性格と神の全知全能である偉大さを学ぶ ・聖書をとおして、神のさまざまな面を学び、人生においてもっとも大切なことは「神を知る」ことであることを心から理解するようにする ・教材　新共同訳『聖書』、English Japanese Bible Lessons(Life Ministries)、『初めてのカテキズム』	1）週３日の合同礼拝 2）週３日のクラス礼拝 3）毎週１時間の授業 4）学年別修養会 5）行事 花の日・収穫感謝・クリスマス等
	２年	・新約聖書を中心に、「人間とは何か」「生きるとはどういうことか」というテーマをめぐって、様々な角度から考える ・生徒自身が、聖書の言葉に揺さぶりをかけられながら、自分自身の人生、その意味、その価値、生き方について主体的に考える ・教材　新共同訳『聖書』、『神の揺さぶり』	
	３年	・聖書の歴史観を学び、歴史における神の救いの業の進展を追い、そのなかに自分もあることを知り、生きる力を確かにする ・旧約聖書をとおして、「神の摂理」を知る ・新約聖書をとおして、「救いの完成」へと向かう歴史を学ぶ ・教材　新共同訳『聖書』	

に与えられた大事な使命があるという確信に立ち、次の教育目標を掲げる。

（1）一人ひとりに与えられた個性と能力を生徒と共に発見し、それを育む。

（2）将来の使命実現に向かって、生徒たちの学力を伸ばし、心と身体を鍛える。

（3）偏差値ではなく、生徒の個性に合わせて、ふさわしい進路先を見つける。

この目標を実現するため、中学校と同じ教育方針を掲げている。すなわち（1）宗教教育　（2）人格教育（3）知育体育（4）国際教育である。

教育の基本は聖書・キリスト教教育にある。

6．2）内容

（1）礼拝

毎朝、8:40～9:00の20分間、礼拝を持っている。毎週、月、水、金曜日はクラス礼拝である。クラス担任教諭が担当する。火曜日は中学校と合同の礼拝を礼拝堂（栄光館）で行う。木、土曜日は全校が栄光館に集まり、礼拝をまもる。

中学校と同様、使用しているのは『旧新約聖書』（新共同訳）および『讃美歌』1954年版と『讃美歌第２編』、『ともに歌おう』である。

礼拝は宗教委員の生徒が準備、司会、奏楽、献金、片付けを行う。栄光館での礼拝は、キリスト

者の教職員や地域教会牧師が奨励を担当する。

(2) 聖書授業

毎週1時間、聖書の授業があり、旧新約聖書を学ぶ。そのさい、自ら問いかけ、答を求めることが重んじられる。また聖書の歴史を学び、人間とは何か、自分の生きる意味をたずね求める。

(3) 行事

入学式、卒業証書授与式を含め、すべての行事は礼拝をもって行われる。

学年別修養会が持たれている。いずれも開会、閉会礼拝また朝礼拝がおこなわれ、主題を定めて聖書の言葉を聞き取る。1年生は4月に1泊2日でおこなう。学校生活、本校の歴史、建学の精神、聖書や賛美歌などについて、オリエンテーションを行う。相互の親睦もはかる。2年生は3月に学校で1日修養会を行う。3年生は8月に1泊2日でおこなう。高校生活を振り返り、講演によって聖書の言葉を聞き取りながら、将来の自分の進路、生き方などについて考え、語り合う。いずれも、キリスト者また牧師である講師を招き、聖書の言葉を基本におこなう。

6月に花の日礼拝をおこなう。持ち寄った花を、放課後、一人住まいの高齢者に届ける。

また6月には保護者を招いてのペアレンツデー行事があり、礼拝をもって始められる。

11月に収穫感謝礼拝を持つ。そこに持ち寄った果物を、花の日同様、放課後、一人住まいの高齢者に届ける。

12月初め、待降節開始に合わせ、校内でクリスマスツリー点灯式をおこなう。宗教委員を中心に、ハンドベル、ブラスバンドなどが参加し、クリスマスに備える。

毎年、夕刻から始まる金沢市民クリスマスに参加する。地域諸教会の奉仕と合唱、演奏が加わる。生徒はハンドベル、合唱、福音書朗読、劇などを担当する。多くの保護者とその家族、一般市民、諸教会の教会員が参加し、ともに主の降誕を祝う。翌日には同様の内容で学校クリスマスが行われる。

(4) 生徒によるキリスト教活動

各クラスから委員が選ばれ、宗教委員会を構成する。委員は、毎日の学校礼拝を中心的に担当し、諸行事をも担う。

宗教委員会が中心となり、年間ボランティア制度が運営されている。生徒が登録し、子ども病院での奉仕など、ボランティア活動を行っている。

中学校と同様、宗教委員が北陸学院高等学校YWCAを構成する。全国集会や活動に参加する。

(5) その他のキリスト教活動

地域教会の礼拝への出席を積極的に勧めている。宗教科発行のしおりに諸教会の案内を掲載し、生徒が近くの教会に出席できるよう配慮する。毎月1〜2回の日曜日を「総員礼拝」と定め、教職員を含め、なるべく教会の礼拝に出席するよう呼びかける。栄光館礼拝後にも、呼びかける。

毎週金曜日8:00からの中学校の早天祈祷会に、有志の高等学校生徒と教職員が参加している。

毎朝8：20より約5分間、中学校と高等学校が合同で、教職員礼拝を持っている。賛美歌、聖書朗読、祈りに続き、報告と打ち合わせを行う。

中学校との合同の職員会議は礼拝によって始まる。校長が奨励を行う。

そのほか、教職員を対象とした、校長による聖書研究が毎月持たれている。

(6) 育友会のキリスト教活動

とくに聖書研究や講演会を行っていない。しかし会合は礼拝もしくは祈りをもって始められる。

(7) 同窓会のキリスト教活動

毎月1回、聖書研究会を行っている。校長や学院長が担当する。クリスマス礼拝も行われ、また同窓会総会は礼拝をもって始められる。

6. 3) 課題

(1) 礼拝の充実

キリスト者教職員が中心となり、礼拝の奨励を行う。しかし必ずしも、学校礼拝の奨励とは何か、共通理解が確立されてはいない。内容は担当者に委ねられている。礼拝の奨励について基本的な事柄を定め、奨励者がそこに立って準備し、語るよう、学びと話し合いを持つ必要がある。

生徒が礼拝司会や聖書朗読、祈り、奏楽を担当する場合がある。担当者が礼拝について理解し、担当内容について共通理解を得られるよう指導しているが、さらにその充実が求められる。

現在、聖書については北陸学院全校で『新共同訳聖書』が用いられている。しかし賛美歌については各校で相違がある。北陸学院小学校では『改

訂版こどもさんびか』[6] を、大学・短期大学部では『讃美歌 21』を用いている。これに対し中学校・高等学校では『讃美歌』1954 年版を中心に用いている。北陸学院全体として、賛美歌をどう考え、統一するかが課題である。

（2）聖書授業

現在、1 年生ではキリスト教の初歩、2 年生で新約の学び、3 年生は旧約の学びと、おおまかな枠が定まっている。しかし詳細については、必ずしも 3 年間の統一したカリキュラムが確立されてはいない。ほんらいキリスト教入門から旧新約聖書の学び、さらに聖書をとおして生きることを考えることまで、一連の流れが求められる。担当教員の裁量に幅広く委ねられているのが現状である。

高等学校聖書科全体として、カリキュラム構成の統一をはかる必要がある。また中高一貫の視点から、中学校聖書科授業との関連性、さらには北陸学院各校の聖書・キリスト教教育カリキュラムとの整合性を持つことが望ましい。その場合、本学院から上位校への入学者と、本学院以外から学院各校への入学者に対して、それぞれ適切な教育内容を立てることが課題である。

（3）地域諸教会との連携

総員礼拝など、生徒と教職員が地域教会に出席することを積極的に勧めている。毎年、教会で洗礼を受ける本校生徒がいる。また多くの教職員がそれぞれの教会で礼拝生活を守り、教会員・教会役員として支えている。諸教会の案内ポスターを受け入れ、また地域諸教会が毎年夏に行う中高生キャンプへの参加も、生徒に呼びかけている。

一方では、多くの生徒が広範な地域から通学してきており、必ずしも全ての生徒にとって教会が近くにあるわけではない。また男子生徒の増加にともない、クラブ活動もまた活発となり、日曜日午前の教会出席がより困難になる可能性がある。キリスト教学校教育同盟加盟大学への推薦入学を志望し、教会の推薦を求める生徒もいる。一人ひとりにとって教会の礼拝が魂の安らぎと励ましとなるよう、それぞれの問題について諸教会と話し合い、相互の理解を深めることが必要である。

（4）キリスト者教職員の確保

キリスト教に立つ本校にとって、キリスト者である教職員の確保は重要な課題である。教職員採用にあたり、教会やキリスト教諸学校などとの良い関係を維持し、また開拓して、本校にふさわしい教職員の確保に努める必要がある。

また教職員が、本学院の歴史、建学の精神に立ち返り、礼拝、聖書研究、祈祷会などに出席するよう積極的に呼びかけること、さらには地域教会につながるよう働きかけていくことが求められる。

（5）キリスト教教育指導者

中学校と同じように、現在、本校には聖書・キリスト教教育の責任を担う宗教専任教諭がいない。中高一貫教育の柱であるキリスト教教育を支え、さらには北陸学院全体のキリスト教教育を担う人材が求められる。

7. 北陸学院短期大学部および北陸学院大学人間総合学部における聖書・キリスト教教育　関係性を理解し、作り出す　《表６参照》

7. 1）教育目標・方針

北陸学院大学は、詩編 111：10 の学院聖句のもと、“Realize Your Mission”「あなたの使命を実現しよう」を標語に掲げ、次の目標を持つ。

（1）福音主義のキリスト教に基づき、神から与えられた自由な存在として自己を探求しつつ、神の前に責任ある、自立した人格を形成する

（2）聖書の愛により「地の塩」となって、人と社会に仕える使命の実現に生きる

（3）知性を豊かにし、感性を磨き、柔軟な思考で、専門知識と技能を身に付け、適確に応用する能力を身につける

（4）どんな時代にも変わらない真理を探究する姿勢を持ち、多様な分野で総合的に活躍する人材を育成する。

ここに示されるように、基本はキリスト教教育である。聖書の人間観を学び、それに基づき、心理学などの学びに助けられて、専門科目の視点から他者との関係を理解し、作り出す。それが「人をつくる大学」の意味である。

7. 2）内容

（1）礼拝

大学および短期大学部では、『旧新約聖書』（新共同訳）と『讃美歌 21』を用いている。毎週、

表６　北陸学院短期大学部および北陸学院大学人間総合学部　関係性を理解し、作り出す

目　標	学　年　目　標		時　間
1) 毎日の礼拝で神の前に心を静める 2) 人類の歴史的知的遺産としての聖書を知り、世界とその歴史に触れ、視野を広げる 3) 人間理解を深め、生きる意味と価値、またその使命 Mission を考える 4) 他者や社会との関わりを理解し、深める 5) 地域の教会の礼拝に参加し、聖書をより身近に知る	1年	・聖書と讃美歌の使い方を知り、礼拝に参加する ・新約聖書の内容と、イエスの地上の生涯を学び、生きる意味を考える ・旧約聖書の内容と、背景となるイスラエル史を学び、自己と社会を形づくる基盤を問う ・北陸学院建学の精神を知り、自分の使命について考える ・本学の精神的支柱である聖書の人間観を学ぶことによって、教育と福祉のキリスト教的基礎を学ぶ ・教材　新共同訳『聖書』	1) 週５日の大学礼拝 2) 毎週１時間の講義 １年：キリスト教入門・「人間総合学入門」 ２年：人間の探究 3) 学科別、学年別修養会 4) 行事 花の日・収穫感謝・クリスマス等
	2年	・聖書の物語や言葉が人間の歴史に与えてきたさまざまな影響を学ぶ ・旧約聖書を通して、人間の自由と責任、罪の問題を学び、人と自分を生かす真の自由とは何か、考える ・新約聖書の人物像を通して、人間の諸問題と課題、また歴史に現れた諸問題と課題を考え、人のあるべき姿と自分の課題について考える ・教材　新共同訳『聖書』	
	3・4年	・大学礼拝に自主的に参加する。 ・諸行事、各科修養会等に自主的に参加し、企画・助言等、活動を支える。 ・キリスト教青年会を中心とする自主活動をとおして、聖書研究、読書会、ボランティア活動等に取り組む。	1) 大学礼拝 2) 花の日・収穫感謝・クリスマス等の諸行事 3) キリスト教青年会を中心とする自主活動

月曜日から金曜日まで、午前10：20〜10：40の20分間、大学礼拝堂または講堂で行っている。収容人員に制限があり、学年ごと、あるいは学科ごとの礼拝となっているが、他学年、他学科の学生も出席することができる。大学宗教委員会によって毎月の主題が定められ、参考聖書テキストと参考賛美歌が示されている。奨励者はキリスト者である学内および学院内教職員、大学宗教主事、地域教会牧師である。

現在、聴覚に障がいを持つ学生がいる。礼拝における配慮は、講義時の要約筆記とは異なる場合が多い。奨励者は努めて原稿を提出しており、当該学生はそれを参考にしながら礼拝を守っている。手話通訳奉仕者が奨励を通訳する場合もある。

前期および後期開始時に、宗教オリエンテーションをおこない、聖書と賛美歌について、また礼拝の意味について説明する。キリスト教入門の講義でも聖書テキストの開き方、賛美歌の歌い方などを教え、初めてキリスト教に触れる学生が礼拝に親しむことができるよう配慮している。

6月には花の日礼拝が、11月には収穫感謝礼拝が行われ、学生宗教委員が各所に花や果物を届ける。地域教会牧師を招き、6月に通常の礼拝時間で１年生対象の特別伝道礼拝が、10月には１時

間を取って２年生対象の特別伝道礼拝が行われる。それぞれ各学年の全学生が出席する。欠席者は録音テープを聞き、レポートを提出する。

12月のクリスマス礼拝には学生が聖書朗読、祈り等を担当し、合唱やハンドベル演奏、手話賛美も加わって、主の降誕を感謝し、賛美する。礼拝後には学科ごとに祝会を開催する。

３月に、卒業証書授与式前日に卒業礼拝を持つ。神の言葉を胸に、各自がそれぞれに備えられた道へと、決意をもって羽ばたいていく。その上に祝福を祈って行われる。

1、２年生の場合、学校礼拝への出席は出席カードに記録される。毎週2．５回以上出席しなければ、必修科目である「キリスト教入門」、「同基礎」、「人間の探求」の単位が認められない。出席不足者にはレポート提出や講義が課せられる。これは、北陸学院がキリスト教教育を根幹としており、学校礼拝を重んじていることの証しである。

学生寮では毎週木曜日夜７：30〜８：00の30分間、寮礼拝が持たれる。キリスト者である教職員と地域教会牧師が奨励を担当し、司会と奏楽は寮生がおこなう。その他、学生寮では、新入寮生歓迎会、クリスマス、卒業生送別会なども礼拝をもって始められる。

(2) キリスト教教育講義

1、２年生はキリスト教に関する講義を必修の基礎科目として受講する。短期大学部では１年生は前期に「キリスト教入門Ⅰ」、後期に「キリスト教入門Ⅱ」を、2年生は前期に「人間の探求Ⅰ」、後期に「人間の探求Ⅱ」を、それぞれ週１時間、各期１単位を受講する。人間総合学部１年生は前期に「キリスト教入門」、後期に「キリスト教基礎」を、２年生は前期に「人間の探求Ⅰ」、後期に「人間の探求Ⅱ」を、それぞれ週１時間、各１単位ずつ受講する。人間総合学部１年生は前期に、オムニバス形式の「人間総合学入門」でも、キリスト教関連の講義がある。

１年生は聖書の基礎知識、新約と旧約の概論を学ぶ。２年生は、聖書の人間観を中心に学ぶ。他に北陸学院大学では３年生で「キリスト教社会福祉」が必修となる。４年生には選択科目として「キリスト教倫理」、「キリスト教学」がある。

多くの学生が本学に入学して初めて聖書に触れる。そのため講義は、礼拝の守り方、聖書や賛美歌の開き方など、初歩的知識の教授を含む。

(3) 行事

入学式、学園祭、スキーセミナー、卒業証書授与式など、すべての行事が礼拝形式、あるいは礼拝をもって行われる。

大学および短期大学部の全学科で、聖書の学びを中心とした１泊２日の修養会を実施している。短期大学部食物栄養学科は５月に１年生のジュニアセミナー、７月に２年生のバイブルセミナーを、コミュニテイ文化学科は５月に１年生、11月に２年生の一泊修養会をおこなう。大学幼児児童教育学科は11月に１年生が短期大学部保育学科２年生と合同で修養会を、社会福祉学科は６月に１年生のフレッシュマンセミナー、11月には１年生と短期大学部人間福祉学科２年生が合同でグッドサマリタンセミナーをおこなう。地域教会牧師が講師、また助言者として参加し、聖書を中心として学ぶ。開会礼拝や朝礼拝、閉会礼拝もおこなわれる。学生が実行委員となり、運営を担う[7)]。

毎週水曜日の礼拝で献金を捧げている。通常の礼拝献金はジャパンプランとして、アジアの子どもの教育費用として捧げる。本学が援助する子どもからの手紙や、その状態についての報告を礼拝堂入口に掲示して学生に献金の意義を伝えている。また花の日礼拝前の数週間に捧げられた分は、各所に届ける花のために用いられる。クリスマス礼拝には各自が別に献金を捧げ、宗教委員会が定めた諸団体に送っている。

2007年より、待降節開始時に大学キャンパスでクリスマスツリー点灯式を行っている。学院全校が参加するが、おもに大学・短期大学部が中心となって、ツリーの飾りつけやハンドベル演奏、合唱、手話賛美などが参加する。

こうした宗教活動は、学生宗教委員会で協議しつつ、本学宗教委員会で決定、実施される。

(4) 学生によるキリスト教活動

各学科、学年ごと数名の学生により、学生宗教委員会を構成している。諸行事の企画、準備、実行などに参加している。この委員会には、各学科から選ばれた教員の宗教委員も参加する。学生宗教委員は毎週の礼拝の献金当番や、花の日と収穫感謝の日のポスター・カード製作、クリスマスク

リスマスツリー点灯式の実施、クリスマス礼拝の聖書朗読・祈りなどを担当する。

学生宗教委員会とは別に、有志の学生が集まり、2008年度後期より週1回、昼休みに聖書を読む集いを行っている。これが核となって北陸学院大学キリスト教青年会へと成長し、大学3・4年生が中心となって礼拝や学科修養会、クリスマス等の行事に主体的に参加し、担っていくよう願う。

(5) 教職員のキリスト教活動

講義のおこなわれる9か月にわたり、毎月1回、聖書を学ぶ会が開かれている。有志の教職員が集まり、宗教主事が聖書研究をおこなう。

大学および短期大学部では教職員礼拝を持っていない。それに代わり、毎週水曜日の午前8：10～8：30の20分間の教職員祈祷会が、有志が出席しておこなわれる。北陸学院の建学の精神に立ち返り、心を静めて神の言葉に耳を傾ける時である。

教職員とその家族によるクリスマスの集いが行われ、礼拝をもって始められる。

(6) 地域教会との関係

本学は地域教会と牧師方によって支えられている。大学礼拝の奨励、各学科修養会の奉仕、また非常勤講師としてキリスト教科目の講義担当などが、牧師方によって担われている。そのことがまた諸教会の伝道活動に資するものとなる。地域諸教会との関係は重要である。

学年初めには、地域諸教会の案内を配布し、学生が教会の礼拝に出席することを勧めている。またキリスト教関連の講義では、毎年度、教会の日曜礼拝の出席レポートが課せられる。

一部学生、また多くの教職員が、教会員・教会役員として、また求道者として地域諸教会に連なっている。教会でおこなわれる特別伝道礼拝やクリスマス礼拝などの案内チラシ、ポスターなどは、依頼にもとづき学生に配布、学内に掲示する。

地域教会牧師との懇談会を毎年2月におこなっている。教会が本学院を支えていることへの感謝を表し、学院から教会への要望、教会から学院への意見などを交換する。諸教会との関係を保つ上でも重要な機会となっている。

7．3）課題

(1) 大学礼拝とキリスト教活動の充実

本学の精神的土台は福音主義キリスト教である。その点でもっとも重要なのは大学礼拝である。毎日の大学生活においてこれが中心を成す。その趣旨から、学生には礼拝出席が義務付けられている。しかし必ずしも全ての学生が礼拝に意味を見出して自主的に加わっているわけではない。その結果、礼拝の規定出席回数を満たした後には、学生の出席者が減少する傾向にある。毎年、数名の学生が、規定礼拝出席回数を満たせず、レポートと講義の受講を課せられる。キリスト教との触れ合いの薄い学生が多いことも一因ではある。しかし礼拝のあり方、その内容を問い直すことが必要である。

学校礼拝は、信仰共同体である教会のそれとは自ずと異なる面がある。しかし学校で行われる奨励もまた、聖書の使信を聴衆である学生に神の言葉として伝える点では、教会の礼拝における説教と同様である。第一に、聖書の使信には、すべての魂に迫る真実性がある。その使信を正しく読み取った上で、第二に、それが学生の現実にどう触れ合うか吟味し、論理的整合性を保ちつつ学生に分かりやすい言葉で伝える。

礼拝の内容が整えられてこそ、学生もまた礼拝の意味を理解し、積極的に参加することが可能になる。そのために、奨励者が礼拝について学び、賛美歌、聖書、奨励など、礼拝全般の課題を話し合う機会を設けることが必要である。また学生が司式、奏楽等に参加することも検討する。

(2) キリスト教活動に参加する学生の育成

本学のキリスト教活動には、学生の参加が欠かせない。学生宗教委員会がその役割を担う。しかし委員会だけでは十分ではない。教員からなる宗教委員会の企画した行事を学生が分担するだけに留まりやすい。学生自身が企画段階から主体的に参加し、担うことが望まれる。そのため、キリスト者や求道者である学生を中心にキリスト教青年会を立ち上げ、学生を育てることが求められる。

また学生の教会礼拝への出席を積極的に勧め、出席状況を把握することも必要である。

(3) キリスト者教職員の確保

現在、教員の半数がキリスト者である。しかし若い教員にはキリスト者が少なく、また職員にはその傾向がさらに強い。キリスト者教職員の採用

が求められる。その点でも諸教会との連携が必要である。しかし必ずしもそのことは簡単ではない。現在の教職員が教会と関わりを持つよう勧めることが求められる。

（4）専任の宗教主事の確保

現在、本学には専任の宗教主事が存在しない。学院長が宗教主事を兼務している。宗教主事実務担当を置き、また地域諸教会牧師の協力を得ている。しかしキリスト教を建学の精神とし、これを重んじるのであれば、専任の宗教主事は必要である。財政の問題があり、また適当な人材を得ることが難しいが、なお検討の余地がある。

8. 北陸学院スタンダード聖書・キリスト教教育における課題

8. 1）礼拝

北陸学院の聖書・キリスト教教育の中心は礼拝にある。各校での礼拝の充実、質の向上が欠かせない。そのため、いくつかの検討課題がある。

（1）讃美歌集の統一

現在、各校では新共同訳聖書が用いられている。賛美歌については、幼稚園は幼児の現状を考え、『幼児さんびか』や『改訂版こどもさんびか』などを、比較的自由に用いている。小学校は『改訂版こどもさんびか』である。中学校・高等学校は『讃美歌』1954年版と『讃美歌第２編』、『ともに歌おう』を使用している。大学は『讃美歌21』である。各校の事情が背景にある。また賛美歌集についての意見の相違もある。

しかし北陸学院が全体として統一した聖書・キリスト教教育をおこなう場合、賛美歌集の統一は必要である。その場合、①使用聖書との関係、②今日の生徒・学生に理解でき、共感できる賛美、③歴史的に受け継がれてきた賛美の遺産の継承、④礼拝にふさわしい賛美、⑤教派的伝統や国・民族を幅広く取り入れた多様性、などを十分に検討し、礼拝で生徒・学生が心から賛美を歌うことができるよう配慮することが求められる。

（2）司式者

幼稚園、大学では教員が司式を担当している。小学校、中学校、高等学校では児童・生徒が行う場合もある。司式者には、①聖書朗読の訓練、②祈りの学びが求められる。園児・児童・生徒・学生が礼拝司式を担うのは意味がある。司式についての研修を各校で、また聖書・キリスト教教育部会で行うことが考えられる。

（3）奨励者

現在、北陸学院全体で礼拝奨励（説教）についての指針等は定めていない。しかしある程度の共通理解は必要である。

①基本的にキリスト者である教職員、地域教会牧師が担当する。礼拝の奨励はキリスト教信仰によって語られるべきものだからである。但し、礼拝共同体である教会とは異なり、幼稚園などにおけるように、非キリスト者が奨励を担当する場合もありうる。その場合、各校責任者による承認と指導が求められる。

②聖書の使信に基づいてなされる。まったく聖書から離れた内容ではなく、何らかの形で聖書の言葉と関係づけられることが求められる。

③奨励は園児・児童・生徒・学生の心に触れるものであってほしい。聖書の言葉はすべての魂に迫り、慰め、励ます。その使信を、聞き手の現実に即して語ることが求められる。

奨励について共通理解を得、礼拝を充実させるために、奨励者の研修と話し合いが必要となる。

8. 2）一貫性の確保

（1）聖書・キリスト教教育部会の開催

北陸学院の聖書・キリスト教教育が一貫性を持つために、まず、聖書・キリスト教教育部会の定期的な開催が必要である。各校の責任者と担当者が集まり、各校の現状と課題を報告しあい、一貫性の確保を目指して話し合う。その結果を各校に持ち帰り、反映させる。こうして毎年度、聖書・キリスト教教育スタンダードを改訂していく。この部会に非常勤講師を含めること、また地域牧師との会合を毎年開催することを考えてよい。

（2）専任者の必要

ほんらい、各校に聖書・キリスト教教育を担当する専任の教務教師が必要である。現在は、宗教教育の責任を負っているのは、幼稚園では園長である。小学校、中学校、高等学校は担当教諭と校長であり、小学校校長は信徒である。大学・短期大学部では宗教主事実務担当者と、学院長である宗教主事である。責任者はすべて兼任であり、専任者はいない。さらに礼拝や授業、修養会などで

の指導の多くを、地域教会牧師に依存している。財政と人的資源の問題があり、専任の教務教師を招聘することは簡単ではない。むしろ地域諸教会との協力関係を保つ点では、現状にも意味があるかもしれない。しかし北陸学院における聖書・キリスト教教育は重要であり、その範囲は広い。まったく専任者がいない現在の状態で、そのすべてを担うことはできない。今後、改善していくべき課題である。

(3) 宗教センターの必要

さらには、北陸学院宗教センターが立てられることが望ましい。ここに各校の専任教務教師と担当職員が集まる。幼稚園から大学までの聖書・キリスト教教育全体を把握し、担う。各校の礼拝、キリスト教行事を統一的におこない、園児･児童･生徒･学生、また保護者に向けて情報を発信する。地域教会との関係を維持、強化する。他のキリスト教学校との連絡、連携を担う。こうした構想を温めていきたい。

8. 3) 園児・児童・生徒・学生

(1) 礼拝プログラムの充実と一体性

礼拝については、各校で年度目標、月別主題、聖書テキストなどが定められている。しかし北陸学院全体として統一した全体像が定まっていない。上位校に進学すると、下位校在学中と同じテキスト、同じような奨励を繰り返し聞くことになりかねない。各校の礼拝内容を報告しあい、重複しすぎないようにするなど、適度に調整をはかる必要がある。

他方、毎年度、北陸学院主題聖句が定められている。年度当初に、これを各校の礼拝のなかで取り上げ、すべての園児・児童・生徒・学生が同じ主題聖句を礼拝で聞くことができるようにしたい。

また幼稚園から高等学校までは、前身の金沢女学校が開設された9月9日の前後に、毎年、創立記念礼拝をおこなっている。園児・児童・生徒が本学院の歴史を知り、建学の精神に触れる大切な時である。ただし大学・短期大学部は、9月は休み期間中であり、後期開始後の10月に行っている。

(2) 授業・講義の一貫性の確保

授業・講義においても、礼拝と同様、北陸学院全体の一貫性を確保することが必要である。実際には各校のなかだけで授業構成が行われているのが現状である。つねに北陸学院以外の学校からの入学者を意識する結果、教育内容が毎回、初歩段階から始まらざるをえない。下位校からの進学者は、同じ内容を繰り返し学ぶ結果となる。

たとえば年度当初だけでも、学院内からの入学者と他校からの入学者を分け、後者にはキリスト教の初歩を、前者にはより進んだ内容を教えることはできないか。検討が求められる。

(3) 礼拝・行事への参加

学校礼拝やキリスト教行事に、園児・児童・生徒・学生が主体的に参加する機会を増やしたい。幼稚園の園児は花の日、収穫感謝の礼拝後に訪問をし、クリスマスには降誕劇を演じる。小学校以上では、これに加え、礼拝でも児童・生徒・学生が役割を担う。小学校では宗教委員の児童が礼拝の司会、献金を担当する。中学校、高等学校では礼拝の準備から司式、奏楽、献金、後片付けに至るまで、宗教委員の生徒が行う。大学・短期大学部では献金を担当し、花の日や降誕日礼拝の案内ポスターを制作、展示するなどの活動を行っている。また修養会の企画、実行にも実行委員として加わっている。さらに参加する機会を増やしたい。また礼拝の大切さを園児・児童・生徒・学生自身が自覚し、友だちに呼びかける働きもあってよいのではないか。

(4) 地域教会への出席の勧め

各校で地域教会への出席を勧めている。小学校では児童ノートに、中学校、高等学校、大学・短期大学部では宗教オリエンテーションで教会案内を配布している。高等学校、大学・短期大学部では授業や講義のなかで、教会の礼拝出席レポートが出されることもある。

従来、主日の礼拝出席を勧める意味から、日曜日午前にはクラブ活動を抑制してきた。一方、学院全体が男女共学化し、また北陸学院大学が開設されたことにより、クラブ活動が活性化することが予想され、また願われている。地域教会の礼拝への出席とクラブ活動の活性化との両立をはかっていく必要がある。

(5) 自主的キリスト教活動

中学校、高等学校では、生徒がYWCAに参加

し、聖書研究を行ったり、奉仕活動をしている。大学・短期大学部では、聖書を読む会が始まっている。これら生徒・学生の自主的なキリスト教活動を、担当教員や財政援助によって支援し、育てていくことが求められる。

8. 4）教職員

各校で始業前に礼拝を行う。しかし幼稚園では通園バス運行のために全員参加ができていない。中学校・高等学校ではきわめて短い時間で行っている。法人本部では毎朝、礼拝の時間があるが、大学・短期大学部では教職員の毎日の礼拝は行われていない。

一方、幼稚園では教師会の初めに礼拝と聖書研究を行う。中学校・高等学校の職員会議は校長の奨励で始まる。中学校では自主的な祈りの会が毎週持たれる。大学・短期大学部では有志による祈りの会が毎週、聖書を学ぶ会が毎月、行われる。

毎朝、礼拝をもって一日の仕事を始めることが有益である。幼稚園は、教員全員の揃う夕方に行うことも検討してよい。中学校・高等学校の教職員礼拝に短い奨励を加える余地はないか。大学・短期大学部では、せめて職員に教員が数名でも加わって礼拝を持つことができないか。

教職員が地域教会の主日礼拝に加わることが重要である。園児・児童・生徒・学生と同様、教会案内を配布する、礼拝出席をとくに勧める日を定める、園長・校長・宗教主事が教職員の信仰的指導を行うなどが考えられる。

8. 5）保護者

幼稚園では「園長と話す会」、小学校では育友会宗教委員会による「木いちごの会」が行われている。中学校と高等学校、大学、短期大学部の保護者のための聖書研究等の集いは行われていない。

8. 6）地域諸教会との関係

北陸学院は地域諸教会と良い関係を保っている。園児・児童・生徒の多くが、学校から勧められて教会学校に通っている。ほぼ学生全員が教会の礼拝に出席した経験を持つ。洗礼を受け、キリスト者となる者もある。

一方でキリスト者の生徒・学生はそれほど多くはない。また、高校生がキリスト教学校教育同盟の大学に進学することを意識し、学校推薦を求めて教会生活を行うこともある。学生が教会の礼拝に出席するのは、ほとんどの場合、レポート提出のためである。動機はさまざまであれ、まず地域諸教会に結びつくことを願う。しかしそのことをきっかけとして、教会生活が続くためには、個人の状況に応じた指導が必要である。

多くの教職員が地域教会に所属、または継続的に礼拝に出席している。全教職員のうちキリスト者が半数を越えるよう願っている。

地域教会牧師方には、各校の礼拝奨励、修養会の講師や助言者を依頼している。また金沢市における市民クリスマスに高等学校生徒・教職員が参加している。小学校以上の各校にはハンドベルクラブがあり、教会での演奏活動も行う。

各校が教会の特別伝道礼拝や演奏会のポスターや案内チラシ、クリスマス案内などを受け入れ、掲示、配布している。中学校・高等学校では、年度当初に各教会の案内ポスターを一斉に掲示する。大学・短期大学部には宗教委員会の掲示場があり、そこに教会のポスターを掲示する。

中学校・高等学校や、大学・短期大学部を会場に地域教会の牧師会が開催されることもある。また教会牧師方と大学・短期大学部との懇談会を行っている。

そのような北陸学院と地域諸教会との連携を、さらに進め、北陸学院各校が積極的に教会との関係を深めていくよう、努力することが求められる。

＜注＞

1　2007 年 12 月 3 日に文部科学省から大学開学の認可を受けた。人間総合学部のみを有し、幼児児童教育学科と社会福祉学科の 2 学科からなる。

2　明治政府は教育制度の展開をはかる際、1890（明治 23）年の教育勅語に始まり、1899（明治 32）年の文部省訓令第 12 号に至って、宗教教育を排除しようとした。（石田 加都雄「明治 32 年文部省訓令第 12 号宗教教育禁止の指令について」1961 年『清泉女子大学紀要 8 号』pp. 41～69. 清泉女子大学）

このため、1983（明治 16）年にやはりキリスト教教育を掲げて設立された男子校の愛真学校は 1899（明治 32）年に廃校せざるをえなかった。また金沢女学校に続き 1886（明治 19）年に E. フランシナ･ポーターによって設立された私立英和学校もまた 1903（明治 36）年に廃校となる。

金沢女学校は英和幼稚園と共に存続するが、1900（明

治33）年に大幅にカリキュラムを変更し、北陸女学校と名称変更することを余儀なくされた。太平洋戦争後に北陸学院を設立するまで、金沢女学校、北陸女学校は、他のキリスト教学校と同様、聖書に基づく教育を守るために多大の犠牲を払わなければならなかったのである。

3「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」（ローマの信徒への手紙10：17）　聖句を暗記し、奨励を聞き、賛美歌と祈りを聞いて覚えることにより、神の言葉は魂に刻まれ、心からの祈りと賛美が現れ出る。聞くことから語ることへ、さらに読み、書くことへとつながっていく。幼児の礼拝は、言葉の発達の原点に深く関わっている。

4 ないし日曜学校、子どもの教会など。

5 日本基督教団の現任教師は、教会・伝道所の礼拝や伝道牧会に当たる教会担任教師のほか、巡回教師、神学教師、教務教師、在外教師の5種に分類され、その他に休職教師、非現任教師として無任所教師および隠退教師がある（「教規」第128条）。これによれば、教務教師は、教会以外の関係団体にあって宣教に携わる。学校のキリスト教教育を担う教師がこれに当たる。この場合、日本基督教団の教規に定められた教師として、学校がその宣教のために招聘し、キリスト教教育の責任を明確にすることが求められる。

6『改訂版こどもさんびか』（2002年、日本基督教団出版局）は、それまでの『こどもさんびか』を土台とし、日本や世界の新しい歌を加え、『讃美歌21』の中から子どもの歌える歌を取り入れたものである。『讃美歌21』の子ども版という面がある。

7 北陸学院大学は2008年4月に、それまでの北陸学院短期大学にあった保育学科と人間福祉学科の入学者募集を停止し、新たに北陸学院大学人間総合学部の幼児児童教育学科と社会福祉学科を開設して開学した。また北陸学院短期大学の食物栄養学科とコミュニテイ文化学科の1・2年生、および保育学科と人間福祉学科の2年生は、北陸学院短期大学部に所属することとなった。そのため、2008年度は、短期大学部保育学科2年生と大学幼児児童教育学科1年生が合同で修養会を、また短期大学部人間福祉学科2年生と大学社会福祉学科1年生とが合同でグッドサマリタンセミナーを開催することになった。